新時美術評

近藤誠一

歌心を保つには

日本は今、明治開国150年、元号改変、東京五輪開催、文化庁の京都移転など今後の「国のかたち」を考える上で、極めて重要な節目にある。

日本の歴史に「起承転結」があるとすれば、白村江での敗戦（663年）で強大な隣国の存在を知って危機感をもち、律令国家建設を始めた時が「起」、中国や朝鮮半島に学びながら国家建設を展開し、独自の文化を育んだ1200年間が「承」、明治開国によって欧米の近代化に切り替えてからの150年間が「転」、そして欧米の近代主義の行き詰まりの中で、これまで学んだ東西の知恵を再融合して国の最終的な形を模索していくこれからが「結」ということになろう。

この「結」を考えるに当たって重要なのが、文化芸術の位置付けである。文化芸術は、古来人々の生活や学問の重要な一部となってきた。中世ヨーロッパの大学で学問の基礎となったリベラレアーツでは、音楽、すなわち芸術が重要な要素だった。芸術は人間として成長する上で欠かせない教養のひとつと位置付けられていたのだ。

しかし17世紀の「啓蒙の時代」、すなわち理性の発見を契機に欧州で始まった近代化は、客観性を軸とする学問として自然科学や社会科学を発達させ、主観すなわち感性が主役となる芸術を脇に追いやった。自然科学や経済学が学問の主流となり、芸術はひとつの領域（科目）に過ぎなくなった。それでも近代を生んだヨーロッパ自身では、ジャック・ラング元仏文化大臣の努力（文化予算の倍増など）にみられるように、文化芸術には重要な社会的地位が与えられてきた。彼は投資で最も重要な分野は教育と文化だと述べる。前号でご紹介した、フランス人の美に対する繊細で開かれた感覚は、こうして磨かれてきた。

他方黒船を迎えて、一刻も早く西欧に追いつかねばならぬと考えた日本は、富国強兵を最優先し、西欧以上に芸術の領域化が進んだ。この流れは岡倉天心らの努力にも拘わらず続き、戦後の経済至上主義に引き継がれた。最近のグローバル競争の激化、効率重視の風潮、国際政治の不安定化は、芸術軽視の流れを強めるばかりだ。

しかし歴史を振り返れば、日本人もまた、否西欧以上に文化芸術を日々の生活のなかで嗜み、味わってきた。万葉集には多くの防人の歌がある。雨に降られて蓑を所望した太田道灌に貧しい農家の娘が差し出したのは、ヤマブキの一枝であった。「七重八重　花は咲けども　ヤマブキの　ミノ（実の、蓑）ひとつだに　無きぞ悲しき」という歌が込められていた。12世紀、奥州の衣川の戦いで、源義家が敗走する安倍貞任に、「衣のたてはほころびにけり」という下の句を投げかけたのに対し、即座に「年を経し糸の乱れの苦しさに」と上の句を投げ返すだけの素養が貞任にはあった。平安時代の恋の想いは、花の枝に結ばれた和歌が届けた。便利なスマホなどなかった。

そう、日本人はどんなに教育レベルが低くとも、貧しくとも、危急の際にあってさえも、歌心を忘れず、手間と暇をかけて、自分の手で心を込めて想いを表現してきた。この国はそろそろ効率の追求から、この素晴らしい文化の回復へとバランスを取り戻さなければならない。文化庁の京都移転は、日本のジャック・ラング氏を生むだろうか。

（近藤文化・外交研究所代表）